

## 【コラム】

## 芸術ワークショップ演習について

金井 直

信州大学人文学部芸術コミュニケーション分野は、2007年に設置された比較的新しい教育研究ユニットである。所属教員は3人。芸術の領野の幅広さを思えば、ごく少数のスタッフと言わざるをえないが、各教員の専門とする芸術ジャンル（ダンス、音楽、美術）、アプローチ方法（実技、理論、キュレーション）、対象地域・国の違い（アジア、トルコ、イタリア）によって、多様性と可能性を最大限あわせもつプログラムを展開している。開講する授業には、オーソドックスな講義形式のものも含まれるが、より特徴的な授業として芸術ワークショップ演習がある。これは学外での公演・発表を前提とし、その実現に向けて、学生自らが企画・運営のすべてをおこなうものであり、芸術と社会の関係（の強弱）を肌で感じ、さらに両者の互恵的な関係構築を目指す試みとなっている。

筆者のワークショップ演習の場合、現代美術展の開催を課題の中心とし、そのためのテーマ・作家・会場リサーチ、計画立案、広報活動、作家の制作・展示サポート、会場の維持管理、教育普及プログラム、成果分析を、毎年おこなっている。

## これまでの活動

現代美術を中心に据えた最初の企画は2008年の「國府理 move to moving」展であった。松本市美術館企画展示室のホワイトキューブ的な広い空間をアクティブに活かすアーティストとして國府理氏を招聘し、彼のヴィークル型彫刻をまとめて紹介した。

学生たちは作家の指示下、また、学芸員のアドバイスとサポートを得つつ、展示空間づくりや作品設置に取り組んだほか、中学生向けの作品体験プログラムも企画運営し、充実した実習経験を積むことができた。この「國府理」展の成果・実績を踏まえ、翌年度以後も松本市美術館で同館との連携展覧会を開催することになる（ただし会場は市民ギャラリー）。2009年の「Costume in play」では学生の意向を受けて、西尾美也氏を招聘。加えて、曾根裕氏とキムスージャ氏の映像作品を展覧会に組み込み、コンセプトの展開・強化、内容の国際化を図った。2010年の「森北伸 containers with rhythm」展は、作家リサーチとコンセプト設定から運営の実際まで、すべてを学生が進めた初めての展覧会で、森北氏の全面的なご協力によって、教育的な成果と、文化芸術上の意義をあわせもつ、貴重な実績となった。2011年の「名前前の落としかた」も学生主導の企画展であり、参加作家、梅田哲也氏、小栗沙弥子氏、小林耕平氏の三者三様の方法・素材によって、ヴァリエーション豊かな空間が実現。トークゲストに白川昌生氏を招くなど、日本の現代美術シーンを色濃く反映した展覧会となった。2012年の「ここも そこも どこかのここで」展は、ひきつづき松本市美術館を会場としつつも、地域の文脈への働きかけを強めた回である。小林史子氏は、松本を代表する近代建築、山崎歯科医院の解体から生じた大量の煉瓦を用いたインスタレーションを制作。前沢知子氏は、共同制作や街なかでの絵画交換を実践。

水野勝規氏は美術館内での展示に加え、市内の倉での映像上映もおこなった。

美術館というハード・制度の外への関心は、翌2013年には、脱美術館・地域展開志向の展覧会「アーケードーかたち・リズム・交差一」に結実する。参加作家は佐々木愛氏と文谷有佳里氏。二人の対照的なコンセプト・スタイル・技法のドロイングが、松本市内の6軒の菓子屋のショーウィンドーを賑やかに飾った。佐々木氏はさらに、信州大学松本キャンパス内の自然科学館を会場として、ドロイング展示やワークショップをおこない、学内施設活用の可能性を開いてくれた。このまちから大学への還流を、さらに徹底させたのが、2014年の展覧会「信州大展会2014～探求の庭」である。渡辺英司氏を中心に、青田真也氏、小栗沙弥子、堀田直輝氏が、自然科学館に加え、キャンパス内の図書館や広場等に作品を設置。さらに、渡辺氏の指示と助言の下、学生約30人も制作・設置を試み、学内全体に作品が広がった。

展示空間はすべて学生によるリサーチと関係部局との交渉によって確保されたもので、結果的に、学内施設の魅力を学生の目線で再発見する機会となった点は重要である。とくに強調しておきたいのは、学内に遺る有形登録文化財、旧松本歩兵第五十連隊糧秣庫、通称赤レンガ倉庫（1908年頃）を清掃・整頓し、インスタレーション作品の展示空間としたことである。芸術を介して歴史と直に触れ合うことは、学生たちにとってきわめて重要な学びの機会となったが、同時に、キャンパス内施設の将来的な利活用を考えるうえでも、有意義な試行であった。赤レンガ倉庫について、今後さらに学生と教職員が一丸となって、歴史に対して誠実な、そして、未来に対して開かれた関わり方を、広げ、深めていければと思う。

## 成果と課題

いわゆる実技系ともマネジメント系とも異なる人文学部の特性（専門人材よりもオールラウンドな知の実践者を養成する）と、歴史・文化のコンテンツに恵まれた地域の特徴を活かしながら、上記のとおり、2008年以来7回の現代美術展を開催したが、この間、一貫して活動目標として掲げてきたのが、以下の3点である。

1. フィールドに開かれた学習実践
2. 芸術家支援
3. 文化的オルタナティブの創出

1に関して、学生たちが展覧会の実現を通して、多くの人々の多様な知・経験・価値観に接することを重視してきた。来場者、作家、報道関係者、商業者、行政関係者、大学関係者との出会い・交流・協働は、彼らの学びにとって、さらには進路・将来にとって、きわめて重要な刺激・参照項となっている。

2について、作家の選定にあたっては、単純な権威主義、有名人崇拜、悪しきアマチュアリズムに陥ることなく、真摯に制作に向き合い、質の高い作品を発表しつづけている芸術家との出会いを重視している。また、展覧会の実現が作家の活動支援となるようなスキームづくりにも留意してきた（単に作品を展示させてもらって、お客に見てもらおうといった一方的な“展示会”はおこなわない）。学生が作家に教導されるだけでなく、学生との協働が作家にとってもなにがしかの刺激や蓄積となるような双方向性・互恵関係の構築である。

3は地域特性と関わる。周知のとおり松本は音楽や工芸・クラフトで知られる街である。まつもと市民芸術館を拠点とする演劇・パフォーマンス等の動向も見逃せない。一方、

## 芸術ワークショップ演習主催展覧会

開催年度	展覧会タイトル	参加作家	会場	会期
2008	國府理 move to moving	國府理	松本市美術館企画展示室	6月13-15日
2009	Cosutume in play	西尾美也、曾根裕、キムスージャ	松本市美術館市民ギャラリー	11月17-23日
2010	森北伸-containers with rhythm-	森北伸、小林亮、山村一美	松本市美術館市民ギャラリー	11月18-21日
2011	名前の落とししかた	梅田哲也、小栗沙弥子、小林耕平	松本市美術館市民ギャラリー	11月17-23日
2012	ここも そこも どこかの ここで	小林史子、前沢知子、水野勝規	松本市美術館市民ギャラリー、池上邸	11月22-29日
2013	アーケード-かたち・リズム・交差-	佐々木愛、文谷有佳里	信州大学自然科学館、開運堂他	11月9-24日
2014	大展会2014-探求の庭	渡部英司、青田真也、小栗沙弥子、堀田直輝	信州大学自然科学館、附属図書館他	11月14-24日

美術の分野では、草間彌生氏の圧倒的な存在感はあるものの、現代美術の“いま”を紹介する機会は非常に少ない。この文化的空所を埋めることを常に念頭に置き、展覧会を企画してきた。マスメディアの力と経済原則が、優勢な文化をますます優勢化する昨今、文化多様性の担保・呈示は、地域において、大学がすすんで果たすべき役割のひとつであると認識している。

今後も以上の3点を重視しつつ、芸術ワークショップ演習=展覧会づくりを進めていくが、そのうえで、課題となることはなにか。すぐに浮かぶのは「机上」の重要性である。前期・後期で切り替わる現行システムでは、授業時間が短く、展覧会の経験を記録し、さらに、理論的な分析を進めるほどの余裕がない。経験は蓄積してこそ、手応えのある未来を拓く。いま以上に、ドキュメンテーションと理論学習に時間を割く工夫をしなければならないと考えている。また、そのこととも関連するが、情報・経験を蓄積・公開する場の構築も大きな課題である。もちろん現状でもwebベースでの記録・発信は進めているが、さらに安定的なホームページの構築が急務で

あろう。そして、いっそう重要な課題としてフィジカルな場の確保が挙げられる。年に1回の展覧会では、どうしても経験が一過性のイベントとして消費されがちである。むしろ常設のコミュニケーション空間を設置し、そこでの学生・市民・アーティストの交流をベースとしながら展覧会が生成していくような方法を編み出すことはできないだろうか。そのための場、言わば感性と創造性のラボ（実験室）を、たとえば中心市街区に開設する。大学の機能の一端を、街の文脈に織り込んでいく試みである。見方によっては、空き家・空き店舗対策ともなるだろうし、より積極的に言えば、未来に向けたまちづくりの起点ともなるはずである。ワークショップ演習の次のステップとして、関係者との討議を重ね、松本、あるいは安曇野での展開を期したいところである。

ところで、なぜアート、それも現代美術なのか。端的に言えば、現代美術は既存の価値観を相対化し、新しい視点を発見するための示唆に富んでいるからだ。コミュニティの内部に閉じるのではなく、複数のコミュニティの境域でこそ生まれ、輝くからだ。単一的な

グローバリズムに巻き込まれがちな現今、学生は、いや私も、そして、おそらくはあなたも、アートを紹介して、こぼれ落ちがちな多様な感受性の発露をすくい取る術を学ぶのだ。

ローカル・グローバルの枠組みを超えた個への眼差し、多／他文化共生への意志をもって、これまで以上に、まちとひととアートとの信頼関係を醸成していければと思う。

(かない・ただし／信州大学人文学部)